

天 界



(第 六 卷)

第 七 十 號

大正十五年十二月

曆及び方位に關する迷信(講演)

新 城 新 藏

この一文は新城教授が本年四月六日京都府立第一女學校に於てなされた講演を同校鳴沂會雜誌第五十八號に掲載されたものであるが甚だ有益なものと思ふので轉載する事にした。(編輯者)

曆及び方位に關する迷信に就てお話致したいと思ひます。近年此迷信が次第に多くなりつゝあるやうな傾があるのは頗る嘆かましいことと思ふのであります。或は之は世界大戦争の後を受け、關東大震災の後を受けて、多少人心に不安を感じしめたさういふやうな原因であるかも知れせんし、又次第に新聞雜誌其他の印刷物などの便宜に依りまして傳播力が多くなつたさういふ點もあるであらうも存ぜられるのでありますが、年々此迷信が廣がつて行くやうに思はれるのであります。年の暮から正月にかけて雑誌屋の店に澤山の偽曆、九星曆が陳列されて居るのであります。さうして其曆の種類分量などは年々多くなりつゝあるやうに思ひます。而も一として本當の事が書いてあるのではない、皆偽曆であります。又日記帳の終りの方に、日の吉凶だとか九星の日ざりなどがあるのも年々多くなりつゝあるやうに思はれます。畢竟世間で需用があるから、要求して居るから次第にこんなものが殖えて行くのであうと思ふのであります。が、頗る嘆かましい現象であると思ひます。

私が豫て敬意を拂つて居る京都の或る宮司の方さ或時一緒になつたことがありました。其方のお話で、大神宮から出して居る曆では世間の要求に應ずるに足らない、もつと世間の要求するやうな、現に今日京極邊で澤山賣つて居るあゝいふ多くの事柄を入れた曆を出すやうに其筋に向つて運動しやうかと思つて居る、さういふやうな話を或時承りまして洵に情ないこと、感じたのであります。世間の實情は或はさうであるかも知れない、現に澤山九星曆を發行して居るのですから世間はそれを要求して居るのかも知れんけれども、それかといつて政府が拵へて大神宮さんが頒布して居る曆にそんなくだらないことを入れなければならぬのでありませうか、其前にもう少し考へて見なければならぬのではないかと思ひます。私は其時直ちに其方に向つて申しました、入れるとすれば、何を入れますかと言つたのであります。明治五年改曆以前の曆の中には澤

山に日の吉凶が書いてありました。併しながら今日世間が要求して居る所謂九星暦はそれとは全く別物であります。でありますから明治維新前の暦に復舊した所でそれが世間の要求ぢやないのであります。然らば世間の要求である九星の日ぎりの善し惡しを入れたらどうかといふ考もありませうが、現に九星の暦には三通りも四通りも皆違つて居るのであります。それを多くの人は知らずに手當り次第買つて來て、今日は善い、明日は悪いと言つて居りますけれども、三通りも四通りも違つて居るのであります。尤もごうせ嘘八百を書いて居るのであるからキチンと合ふ筈がないのでありまして、少しも當てにならない色々の嘘八百を誰が責任を帶びて書く人がありませうか、金儲けの爲に澤山出て居るのでありますけれども、苟も政府の役人が自分が嘘と信じて居ることを暦に書くことは誰しも良心があるならば出来ないこと、思ひます。そんな風に逆戻りして事を考へる前に、もう少し吾々は何とか處置法を考へて見なければならぬのではないかと思ひます。

又友引の日にお弔ひを見合せるごいふやうな事が廣く行はれ、又次第にそんなくならない風習が廣がりつゝあるやうに思はれるのであります。之も多くの人は友引の日に葬式を出して悪いご心から信じて居る人は少いと思ひます。多くの人は世間が悪いごいふならば、強ひて其日に出さなくともいゝぢやないか、一日か二日日取りを繰合せたらいゝぢやないかといふやうな妥協的態度で其日を避けて居るやうな場合が多いのであらうと思ひます。併ながら多少餘裕のある階級の人でお弔ひの日を一日や二日繰合せることの出来る人はよいけれども、そんな事が一般の風習になつて居るが爲に、それ程の餘裕の無い人に向つて無理押付けに其日を避けて葬式を出させないやうな風に、世間が不知不識壓迫して居るのであります。誰が壓迫して居るかごいふも、所謂餘裕のある階級の人が妥協的態度を執つて居るが爲に、それが一般の風習を作して、餘裕の無い人にまで壓迫を加へて居るのであります。

更に近頃やかましく言つて居る丙午の迷信であります。丙午年の嫁さんは家庭の主婦として不適當である。成べく避けた方がよいごいふやうな迷信が行はれて居りまして、候補者が二三人ありまして、それが何れも同じやうなものであつたならば成べくならば丙午でない方を選ぶごいふ、極く僅かの心持であるかも知れませんが、其極く僅かの差別待遇を與へられたが爲に、幾十萬の丙午年に生れた娘さん達がざれ程不幸を見て居るか知れないと思ふのであります。此處にお集りの中に、或は丙午の年に生れられたお嬢さんが居られるかも知れない、或は又此處にお集りの方の知つて居られる娘さんの中に丙午年に生れた人があるかも知れない、その等の方々は痛切に其こころを感じて居られること、思ひます。何等非の打ち所のない立派な家庭の主婦としての資格を備へて居られる人が、單に丙午の年に生れたごいふだけの理由で縁遠いごいふことが

實際の實例であるのであります。是程世の中に情けない事があるでありませうか此不都合なる差別待遇を慇懃すべき所がないのであります。まさか聲さんの家に行つて理窟を言つてもモノにならないのであります。不當なる損害を受けて居りながらそれに對して損害賠償を訴ふべき所がないのであります。再び三度び縁談が成らんとして破れたが爲に前途を悲觀して身を捨てた人すらあるといふやうなことが新聞に見えて居るのであります。私共は斯の如き悲慘な事實を涙無くして讀むことは出来ない、憤慨せずして此記事を讀むことが出来ないであります。何處に向つて訴ふべきか、何を攻撃すべきか、所謂迷信團體であります、迷信全體であります。

僅かなる友引の日を妥協的態度で許さうといふ心持で、僅かの日取りならば何がなしに世間が言ふからといつて九星曆を見やうといふ心持は、一人々々にこつては僅かの心持であるかも知れませんが、それが積り積つて斯の如き不當なる社會的現象を起して居るのであらうと思ふのであります。お集りの方の中には深く迷信を信じて居られる方は無論無いであらうと思ひますが、私の希望致しますのは、進んで迷信打破に努力せられんことを希望するのであります。其爲に一體斯の如き迷信はさうして起つたものであるか、迷信の來歴、起原は如何なるものであるかといふことを御參考までに申上げて見たいと思ふのであります。

迷信の中でも曆及び方位に關する迷信は何さなく素人から見ると、専門的に何等か理窟がありさうに思はれるのではないか知らんと思はれる。殊に九星なご星といふ字でも付いて居るご天文の理窟でもあるのか知らんと思ふやうな人も無いごは限らないのであります。そこが迷信跋扈の勢をなした理由なのでありませうが、是等の迷信總てが何等理由の無いものであるごいふことを申上げて見たいと思ふのであります。單に曆及び方位に關する迷信にしましても迷信の種類は澤山あります昔行はれて居つて今廢つて居る迷信があり。又昔行はれずして此頃盛に流行して居る迷信があります。色々迷信には種類がありますが、一々之を申述べることは出来ないであります。其中今日行はれて居る迷信の主なるものは九星の説に基いたものであります。日の善し惡しであるごか年まはりの工合であるごか、家相方位の善し惡しであるごか人の運勢であるごか、之等を悉く皆九星の説に依つて判斷して居るのが今日現行の迷信であります。

抑々九星の説といふものは、其基く所は二千年も昔から支那東洋方面に行はれて居つた所の五行説があります。其五行説から發達したご言ひますが五行説から段々それが出來て参りまして九星説が出來たのであります。五行説は何時始つたか、さういふ譯で始つたかといふ事に付ては色々の説があります。漢學者の間に色々の説がありまして、普通に行はれて居る説では五行説は非常に舊

くから始つたものであるといふけれども、之に付きまして私、多少調べて見ました結果に依りますと、五行説は紀元前四世紀、支那の戰國時代であります。即ち今から二千三四百年前といふ頃に始つたものでありまして、それが近世に至るまで、或は支那に於ては近年に至るまでいつてよいかも知れませんが、約二千年も長い間東洋人の頭を支配して居つたものであります。全く間違つた考へなのであります。九星の説は其五行説に基いて紀元後六百年頃隋唐の時代に拵へられたものであらうと思ふのであります。話が少し細かくなりますけれども、さうして五行説が起つたかといふことを是から一寸申上げます。なぜこんな下らない間違つた説がさうして二千年もの長い間行はれて居つたか、何が爲にそんな説が起つたかといふことを少しく是から申上げて見たいと思ひます。

五行説の起りを考へるといふと、其邊に於ては天文學と關係があるのであります。天文學が間違つて横道に入つたのが此五行説なのであります。一體古い時代の、今から二千年も三千年も前の時代の天文といふものは何をして居つたか、今から二千年も三千年も前の支那の文化は如何なる状態であつたかといふと農業時代であります。農家といふものは春の好い季節に種を蒔いて、夏の極く暑いそして濕り氣のある時に成長させて秋收穫して冬休むといふやうな工合で、一年春夏秋冬の四季の變化を工合よく利用して多量の穀物を作るといふのが即ち農業であります。此農業をしてよく成功せしむる爲には一年の春夏秋冬の四季の變化を知らなければならん、吾々今日は太陽暦を用ひて居りますから四月なら四月は年々同じ季節であります。併ながら太陽暦を知らない時代、一年の長さが三百六十五日四分の一といふことの分らない時代、紀元前二千年三千年といふ古い時代には此季節を知るといふことに頗る苦心したものであります。大抵もう寒さが續いたからもう種蒔きの準備をしやうと思ふと案外又寒くなるといふやうに、一月も二月も季節を間違つたことが明かに今日から見えるのであります。一月も二月も季節を間違つては百姓は甚だ迷惑に違ひないのであります。そこで其時代にさうして季節を判定して居つたかと思ひますと、之は世界皆同様であります。夕方の空の模様を見るのであります。夕方に現はれる星の工合が季節に依つて違ふのでありまして、一つの星を目印しにして置きまして、夕方にあの星が南に行つたからその位の節である、夕方にあの星が東の方に見えるやうになつたから季節は何時頃であるといふ風に、夕方の空の星の現はれ工合に依つて季節を判定して居つたものであります。此星のことを支那では總稱して辰と唱へて居るのであります。辰が詰り據所であります。その星が夕方にあの邊に見えるやうになつたから季節は三月である四月であるといふ風にやつたのであります。之が農業の爲には非常に大事な星でありまして、隨て今日の農といふ字は誰が拵へたのか拵へる時分に主な部分に辰といふ

字を入れてあるこそ程左様に辰は大切であつたのであります。此事を支那では觀象授時こくさうじゆさいふのであります。「時」は春夏秋冬のこであります。古い時代には此字義通りに空の星を見て季節を判定したものであります。斯の如く觀象授時の時代が支那で申しましたならば紀元前二千年頃堯舜の時代から始つて二千年も續いて居るのであります。次第に改良に改良を加へて二千年の長い間觀象授時が續いた結果、次第々々に天文學が進歩して、良い曆が出来るやうになりました。紀元前五六百年頃、支那の春秋時代、孔子さんの生れられた少し前であります。其頃に至りまして漸く一年の長さが三百六十五日四分の一さいふこゝが確かに分つたのであります。長い間の天文學の研究に依りまして、今日から言ふミサイエンス——科學的に空の模様を研究してそれがうまく成功したのであります。それから二三百年經つて紀元前三百年頃に孟子さんの言はれたこゝを書いた書物があります。其中に「天の高き星辰の遠きも苟くも求むるに其故を以てすれば千歳の日至も以て致すべきなり」さいふこゝがあります。此意味は、天は高い星は遠いけれども、筋道に依つて吟味して行つたならば今日から千年後の冬至の季節も今からキチンミ計算するこゝが出来るといふのであります。孟子さんは天文に付ては素人でありますけれども、孟子さんをして斯の如く斷言せしめる程其時分には良い曆が出来るやうになつて居つたのであります。其爲に百姓は一々夕方空の星を見なくてもよくなつたのであります。紀元前二千年の堯舜の時代から二千年の長い間續いての天文學者の仕事は何であつたかさいふこゝ、空の星をよく見て一年の季節を間違はないやうに百姓に知らすさいふこゝが仕事であつたのであります。それが紀元前五六百年頃に目的を達して成功したのであります。

さあ一つ事を成功するこゝ。得_レ望_レ蜀_レ さいふこゝがありまして、味をしめて、もう一つ宜い事は無いかを考へるものであります。之は御尤もの話であります。今まで空の星を見て季節を判斷して居つたのが三百六十五日の循環に依つて春夏秋冬の變化には首尾好く成功したけれども、長い間の經驗に依るこゝ、まだ其外に或は二年おき三年おきに旱魃が來たり洪水が來たり又疫病が流行したり戦争があつたり火事があつたりする。之も序でに天文學者にやつてくれと言つたのであります。天文學者も一つ味をしめたものでありますからやつて見やうを思つたのであります。空の星を見るさいふこゝ、全體としては星は東から西に移るのであります。之の中に所々動く星があります。浪人星があります。之を遊んで居る星といへば遊星、之が動き方が分からないから惑つて居るといへば惑星と稱へるのでありますが、それは星が惑つて居るのではなくして人間の頭が惑つて居つたのであります。星の中には時々位置を變へる星がある。之を今日の言葉で言ひますと五つの遊星でありまして、水星、金星、火星、木星、土星此五つの星であります。是等の星は多くの恒星の間に次第に位置を變じて

大體は次第に西から東に動き、火星は約二年かゝつて復た略元の位置に戻るのであります。木星は約十二年かゝつて元の位置に歸る、土星は二十九年目に一週する。之等の星の位置が或は二年おき或は三年おき二十年おき三十年おきに循環するのであるから、此星の位置の廻り合せに依つて先程考へた或は五年おき十年おきに戦争が起つたり旱魃や洪水があるまいふのが分るのではないか、斯う考へたのであります。今日の頭から考へれば實に馬鹿々々しい事であるけれども、其時代の幼稚な頭では洵に無理のないことであります。

之は西洋でも東洋でも同様に考へて居つたのであります。獨り支那人だけが馬鹿なのではないのであります。西洋では五つの星の位置に依つて其國を支配する所の王さんの運命が定まるものであると考へたのであります。王さんが生れる瞬間に太陽がどの邊にあつたか、月がどの邊にあつたか、又五つの星がどの邊にあつたかといふことを調べたならば王さんの一生の運命がそれで分ると考へたのであります。又王さんが時に運が良かつたり悪かつたり失意の時得意の時があるのは、それは其後の日月五星の時々位置の變化に依るものであると考へたのであります。始めはさういふ風に日月五星の位置に依つて王さんの運命を判斷したのでありますが、終ひにはそれが一般人民總ての人の運命が、生れる瞬間に於ける日月五星の位置に依つて定まる、又其人の時に浮んだり沈んだりするのは其後の日月五星の位置に依るものであると考へたのであります。之が西洋の Astrology (占星術) であります。

此西洋の Astrology は何時始つたかといふことに付ては色々の説があります。人に依つては埃及のピラミットは紀元前三千年前頃に其當時の王さんの運命標を表示して建設されたものであると言つて居る人すらあります。併し私はそれを信じません。そんな古い時代に Astrology がある筈がないのであります。私の今日まで調べた所に依りますと、西洋方面に於ける占星術も恐らく大體支那と同じ時代、紀元前四五百年といふ時代に起つたものであると思ひます。それが近年まで行はれて居つたのであります。併し此占星術に依つて星の位置で運命を占ふといふ爲には、其人の生れた瞬間に日月五星は何處にあつたかといふことをカードに記入して置かなければならぬのでありますから、總ての人が親爺が氣がついて生れた時にチャンミカードに記入して置いて呉れればよいが、親爺がズボラで忘れて居つた爲に、其人が爺になつてから占星術家の所へ行つて、自分の運命を見てくれといふと占星術家は五十年も六十年も前に遡つて、土星は何處にあつた、木星は何處にあつたといふ風に一々それを勘定しなければならぬのであります。此爲に、日月は比較的簡單であるけれども五星の運動を詳しく見る表を拵へて置くことが必要になつて來たのであります。此意味に於て西洋の占星術が幾らか天文學の發達を促したのであります。占星術が本になつて、それから天文學が生れたのであります。

東洋に於ても、支那に於ても其基く考は同じことであると思ひます。地球上に於ける現象は五星の位置に依つて支配されるものであるといふ考へは同じでありますけれども、それを西洋方面のやうに遡つて、一々星の位置を勘定するのは面倒であるといふ少し横着氣が起つたのであります。そこで支那人の考へは一步進めて——こいつの方がよからうと思ひますが、之を根本的に抽象的に考へて見たのであります。さうして凡そ宇宙間の一切の現象は五つの要素の結合消長に依つて生ずるものである。木の性質を帶びたもの、火の性質を帶びたもの、土の性質を帶びたもの、金の性質を帶びたもの、水の性質を帶びたもの、此五つの性質を帶びたものが適當に結合して、或時は木の勢が良くなる、或時は水が勢が良くなるといふやうな、其結び付き工合の勢の消長に依つて百般の現象が起るものである。世上に於ける現象は其結合に依るのである。天に於ける五星の運動も五要素の消長に依るものである、斯う考へたのであります。煎じ詰めれば西洋の占星術と支那の五行説とは全く同じ考へであります。時を同じうして——百年二百年のことは申しませんが大體時を同じうして西洋に於ても支那に於ても同じやうな考へが起つたのであります。之は先程申しましたやうに一般的に文化の發達の程度から考へまして當然の事でありまして、天文學が一段落を告げて、一年の長さに成功して其處に多少餘裕が出来たのでさういふ方向に是から天文學を發達さして行かうかといふ時に、不幸にして邪道に陥つたのであります。

支那の古い書物を見るに漢の初め頃に書かれた書物の中に六行説なんかあります。天地間一切のものは六つのものゝ組合せであるといふことを唱へて居る人があるのであります。或は必ずしも明かに書いてありませんけれども、天地間一切を四つに別けて見やうといふやうなものも之も當然であります。現に今日の易である物を二つ四つ八つに別けて考へて見やうといふのが八卦の考へであります。物を考へるのに四つに別けて考へてもよい、東西南北と四つありますからそれも宜しい。又五本の指を持つて居るから五つに別けて考へる、或は六方といふから六つに考へてもよい。色々の考へがありませうが、其中で五行説が支那で榮えるやうになつたのは、天に於て動く星が五つありますから六行説では一寸工合が悪い。さうして其五星の中の或星は木の性質を有して居るから木星、其中の一つは火の如き性質を有して居るから火星、一つは土の如き性質を帶びて居るから土星といふやうに、五つの星に木火土金水を割當てて居るのであります。六つでは工合が悪いから五つにしたのであります。

併し今日になつて考へて見るに、今から百四十年程前、千七百八十一年にイギリスの天文學者ハーシェルが天王星を發見したのであります。此發見は非常に重大なる發見でありまして、其當時の人心に影響を及ぼしたことが頗る重大であります。一切の人の運命は五星で定まると思つてやつて居つた所が、其外

にもう一つ天王星が現はれた。俺も仲間に入れてくれ天王星が言ふに違ひない。此天王星を入れて人の運命を判斷するこそが本統であるならば、今まで長い間天地間の眞理であるが如く考へて居つた占星術は皆嘘であると言はなければなりません。今まで日月五星、それだけのもので人の運命がキチン定つて居るものであると言つて居つた所が、土星や木星と同じやうな兄弟分の第六男が出て來たのであります。之を押のける譯は無論ないのであります。併し入れやうとすれば今まで二千年もやつて來たやり方が間違つて居りましたと腹を切つて死ななければならんことになるのであります。實はハーシエルの此天王星の發見に依つて、之を境目として西洋の占星術家は世の中から滅びてしまはなければならん筈のものであります。之が其當時の人心に非常に影響を與へたこと見えまして、ハーシエルは天王星發見の功に依つて貴族に列せられたのであります。其當時は多少占星術家もヘコタレたでありませうが、由來斯の如き者どもはなかなか圖々しいのであります。暫くするの間もなく又知らん間に天王星も其に入れて六星に依つて人の運命を占つたのであります。所が又困つたところには千八百四十六年ですかに海王星を發見したのであります。仕方がないそれも入れなければならんといふので今日の占星術は日月七星に依つて人の運命を占つて居るのであります。厚顔無恥と言はなければならんと思ひます。之は決して人事ではない、西洋の占星術家が厚顔無恥であると同様に、元々東洋方面に於ける五行説は五星に依つて成立つて居るのでありますから此星の發見と同時に五行説は消滅してしまはなければならのであります。若し成立つとすれば七行説にしなければならん譯であります。

五行説といふのは五つのものゝ消長に依つて世の中の一切が定まるものであるといふのでありますけれども、今日五行説に依つてものを判斷する場合には相生、相勝、生數等の順序に依るのであります。相生といふのはさういふ譯であるかといふと、木は火を生ずるのだといふのであります。木を燃せば火になるかも知れません。それから火は土を生ずる、之は火が燃えてしまふと土のやうなものが残るからでありませう。之が火は土を生ずる。土は金を生ずる。土の中を掘れば金が出るからでありませう。金は水を生ずる、之は一寸工合が悪ければ夜金盥でも出して置けば夜露がたまるからでありませう。之が相生の順序であります。斯ういふ風に世の中のものゝ木火土金水の順序で勢がよくなつたり悪くなつたり循環して行くといふのが相生説であります。相勝説といふのは、水は火に勝る、火に水をかければ消えてしまふからでありませう。火は金に勝る、火は金を熔かすからであります。金は木に勝る、之は斧や鋸は木を切るからでありませう。木は土に勝る、之は土の中から木が生えて來るからでありませう。土は水に勝る、之は洪水の時には堤防でそれを防ぐから言ふのでありませう。斯様に水火金木土の順で循環するといふのであります。さうし

て斯ういふ順序に考へたか、いふこそれは理窟にも何にもなつて居ないのであります。何故斯ういふこを始めたか、いふこ、支那の戰國の末頃に之を申立てた始めは王さんの迭る順序であります。此相生、いふこは今日の言葉で翻譯しますと所謂熟柿主義であります。長い間憲政會が天下を取つて居るが、おこなくして待つて居れば仲の良い乾分に今度の天下を譲つて呉れる、政友會が天下を取つて居る時に、おこなくして待つて居れば今度は憲政會に政權を渡して呉れる、即ち熟柿主義、之が相生であります。木の性質を帶びたものが天下を取つて居るこ、其次には火の性質を帶びたものが帝王になる、斯ういふこを戰國時代に唱へて居たのであります。相生の方が熟柿主義ならば相勝の方は之は喧嘩をして取る方であります。何か勝つた點を持つて居る者が次に天下を取るこいふのであります。所がさうも之ではまだ工合が悪いこいふので今度は生數順、いふものを考へたのであります。之はさういふ考へ方か、こ申しますこ、凡そ宇宙間に最初に生じたものは水である、其次に火が生じ、次に木が出来た、斯ういふ順序で出来たものである。斯ういふのであります。さうして此

相 生	木火土金水
相 勝	水火金木土
生 數	水火木金土

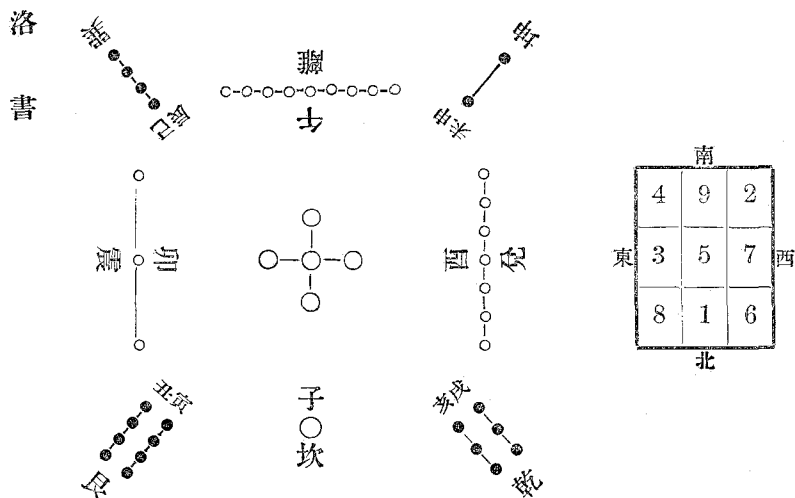
相勝、いふのは相勝るこ同時に相勝つこもなるのでありますから、それが終には相勝が相克になり又克に刀を附けて剋こなつたのであります。今日では相剋こなつて段々昔こは意味

味が違つて來たのであります。縁談の判斷なごをする場合に、相生ならば結構である、木性、火性は相生であるからお芽出たい火性、土性の人は相生であるから良い縁談であるこ申します。併し相勝の方はいかん、火性、水性は喧嘩をするからいかんこいふのであります。之も昔の意味こは全く間違へて居るのであります。昔の意味は相勝こは相勝るである、何か一つづゝ勝る性質を帶びて居るのであるから、其意味から言つても之は相扶くべきものである。現に紀元前三四百年頃に出来た左傳、いふ書の中に、明かに火、水こは牝牡の關係を有するものであるこ書いてあります。水は火の牡なり、火は水の牝なりこいふ風に水、火は牝牡の關係にあるものであるこ書いてあります。如何にも相生、こして芽出たいのであります。それを今日では正反對に考へて居るのであります。一寸考へて見ても、吾々の毎日食へて居る飯は火、水こが調和して暖かい御飯が出来て居るのであります。火、水こは調和すべきものである。決して喧嘩をすべきものでないこ思ふのであります。

之等が五行説であります、之ではさうも世の中が色々複雑になつたから少し之では物足りない、もう少し細かく分けて見やう、斯ういふ考へから、五行説の流派、こ八卦の流派、こ此兩方を取入れて説を一つ作つて見やうこいふ慾張りの考へが出て來たのであります。それが九星説であります。

此九星の起りは夏の禹が洪水を治めた時に、洛水から出て來た神から授つた

龜の背中にこんな模様を書いてあつたといふのであります。之を洛書と稱へて如何にも神祕的に言つたのでありますが、之を今日の數字に直せば圖の如くなるのであります。



こんなことは今日なら小學校の生徒でも知つて居る、不思議でも何でもなければ、之が其當時の人には非常に不思議だつたのであります。それを今日猶ほ大事さうに信じて居るのは甚だ情ない次第であります。之を誰か考へ出したと言つたのでは餘り安つばいから、之は天から授つた洛書であるといふのであります。此數字の順序に依つて數を列べたのが九星の配當であります。數字だけでは、色がなくては面白味がないといふので色を附けた、白を紫を吉に入れて後の黒赤緑といふのを凶にして吉凶の色合を附けたのであります。尚ほそれに持つて行つて木火土金水を東西南北に割當てるといふことをやつたのであります。何にも之は別に意味はないのであります。斯うやつてしまふと、西の方は七の赤で金であります。赤が悪いとすれば何時も西の方は悪い譯になる、東京大學と京都大學が喧嘩をする時には西の方が何時も負けだといふやうに、さう定りきつてしまふと手品の種が無くなつてしまふ。そこで之を時に依つて循環するやうに考へたのであります。循環するには眞中の中宮に入るものが、或は年月日時それぞれの干支に應じて、今年が丙寅ならば丙寅年に應じて眞中に入るものが一つ交替して行く、斯う定めたのであります。此順序に依つて中宮に入るものがそれぞれ年に依つて變れば後はすぐ配當が出来るのであります。併ながら此中宮に入るものをどうするか、一から九までを、どの年に一を入れてどの年に二を入れやうか、之にも何も理窟はないのであります。

が斯ういふことを考へたのが隋唐の初め頃であります。隋の仁壽四年といふ年が恰度甲子でありまして西洋の年でいふと六百四年であります。此甲子の年に一を入れやうぢやないか、斯うやつたのであります。それで翌年は次の二を入れ、ばよいのに九を入れたのであります。即ち一から始つて九八七六五といふ風に逆に數へたのであります。其順で推して行くに日本にしますと元治元年、今から六十二三年前であります但其年が甲子であります——西曆千八百六十四年であります——それから一昨年の大正十三年が甲子でありまして西曆の千九百二十四年であります。元治元年の甲子の時に中宮は一白であつたのであります。それから推して行くといふと大正十三年は四緑になるのであります。干支の方は六十年で循環しますが九星は九年宛で循環しますから六十三年たゝんこ一が戻つて來ないのであります。或年の甲子に一白が中宮に入るならば六十年後の甲子は四緑の順番になるのであります。それから又六十年経てば七赤になり百八十年経たんと本當の順が戻つて來ないのであります。そこで始めの六十年が上元で一白九紫、六十二年目の甲子が中元で四緑三碧、それから百二十一年目が下元で七赤六白、それで百八十一年目に又上元になるのであります。百八十年たつて元に戻つて來るのであります。九星家に言はせるに世の中は百八十年宛で裕になつたり工合が悪くなつたり循環するものである。上元の年に生れた者は品格がよいけれども、中元の六十年に生れた者は中位の人間であり下元の六十年に生れた者は下等の者であるといふやうな説もあるのであります。

所が茲に一つ非常に面白い事があるのであります。今日では斯ういふ風に元治元年が上元の甲子で、一昨大正十三年が中元甲子であるが斯うやつて居りますけれども、徳川時代の初め頃から長い間日本の九星家は六十年程間違つて居つたのであります。讀み違ひといふことありませうし、又支那の書物をよく見なかつたのでもありませう。兎に角六十年喰違つて居つたのであります。一冊の書物ばかりではない皆總てが違つて居つたのであります。文化元年、此年が甲子で千八百四年であります。此頃に於て、支那から來た書物と日本の書物と較べるに中元と下元が喰違つて居るのであります。さあこんでもないことをした、今までの判斷は皆間違つて居つた世の中を誑かして居つたのであります。之も先程の占星術家と同じやうに眞に恥を知る者は此時限り腹を切つて死んでしまはなければならない筈であります、其中のズーズーしい奴が今日まで残つて居りまして、仕方なく支那流に直しました。其證據を私は茲に持つて來て居ります。「方則指要」といふ本があります。其中に、間違つた、こんでもないことをしたといふ風に謝つて書いた證文があります。昔の言葉でありまして讀みにくいのでありますが、一寸それを讀んで見ます。「本朝永祿七甲子の歲を上元とし清國康熙二十三年甲子を上元とす坊間用ひ來れる書には漸く馬場信武が八

卦掌中指南こくし小泉松卓が循環曆くわんげんを證しし今既に百餘年に垂くんぐす然るに乾隆五十五年くわんせい二年に當る今年文化十ち於清國八宅明鏡二卷へいけい胥江顧吾盧これを梓に鐫め次元じげん經按索等合刻し五要奇書成て世に流布せしより協紀けいぎ暨數十家の選擇の書舶しりきたり來て本朝に於て選擇の道大に開けたり蓋し三元一甲子ちがひくも齟齬そごぬ左に拔ふ。

(本朝)	寛永元甲子年	中元
(本朝)	天啓四甲子年	下元
(本朝)	貞享元甲子年	下元
(本朝)	康熈二十三甲子年	上元
(本朝)	延享元甲子年	上元
(本朝)	乾隆九甲子年	中元
(本朝)	文化元甲子年	中元
(本朝)	嘉慶九甲子年	下元

之が不都合な證據物件であります。更に九星は年毎にもそれぞれ九星の配當があり、それぞれの月にも九星の配當があり又それぞれの日にも時にも九星の配當があります。今日普通一般に用ひて居りますのは年とし日ひであります。支那では月毎に九星を用ひて居ります。

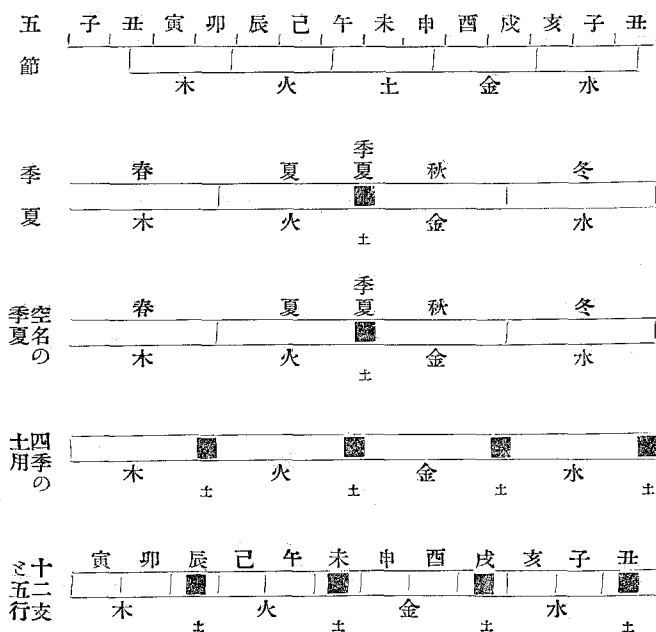
然るに日々の九星、之が又頗る不埒なるものでありまして、流儀に依りまして區々なのであります。たまたま私が手に入れた大正十一年の曆が三通あります。一つは運勢曆、其次は御家寶、もう一つは御壽寶、此三つが三つとも九星の配當が違つて居るのであります。例へば大正十一年十二月一日の九星の配當が御壽寶に依れば七赤、御家寶に依れば四綠、運勢曆に依れば三碧、以下皆違ふのであります。中には同じものなら人が悪いと言はない、良い日だけ取らうぢやないか、神經に障るから、こいふ人があります。たまたま此時に若し其人が此三冊の曆を買つたならばさうします。一日も良い日がありません。三通り列べて見ましても、僅かに三日が無難のやうであります。矢張三日も悪い、さうすれば此十二月中は寢て暮さなければならん、否三百六十五日毎日寢て暮さなければならん、即ち死んでしまはなければならんこになります。併し必ずしも年々の曆が悉く皆違つて居るではありません、それには流儀があるのでありまして、今年あたりのは皆あつて居る筈であります。十年で一週位づゝばかに違ふところがあるのであります。それは支那の種本を讀んで其解釋の仕方が違ふのであります。然も無責任なる高島易斷所本部たかしま三つとも書いてあるのであります。思ふに之は幾らか冥加金を納めればよいのでありませう。同じく無責任な例を申述べます、名前は一寸言ふことを差控へますが、可なり世間に廣く用ひられて居ります日記帳でありまして私はそれをもう長い間使つて居ります。其終りの方に九星の配當などが書いてあります。或年は一つの流儀の九星配當が書いてあり、翌年のは別の流派の九星配當が書いてあります。其爲に前年十二月三十一日と今年の一月一日とは喰違つて居るのであります。

す。其翌年の同じ日記帳を見るに今度は元に逆戻りして居る、さういふものを見てあてにならうとは常識上思はれないことであります。まるでメチャメチャであります。たまたま其年の日記帳の終りの九星の部の起稿を頼んだ人が別々の流派であつた爲に、全く吉凶相反する日取りが書いてあるのであります。

九星の配當にしましても五行説にしましても、其もとは干支を五行及び九星に配當するのであります。甲子の年とか甲子の日とかいふやうに年も月も日取りも又時も同じく支那流では干支を配當して居るのであります。一體干支といふのはどうして出来たかご申しますと、之は可なり研究して面白い問題でありまして、昔から色々の説が傳へられて居るのであります。併ながら私が近年研究した所に依りますと、此十干といふのは、昔大陰曆を用ひて居つた時に、月が圓くなり又は三日月になることに依つて日を數へて居つた、三日月から數へ始めて一、二、三日を繰つた。今日のやうに電燈の無い時代でありますから闇夜に満月の夜では仕事の割振りが大いに違ふ筈であります。闇の夜ならば餘り遠くへ行つて晝仕事をして居ることも暗になるから暗くならない間に早く切上げて歸るやうにしなければならん、又満月の時分であれば少し遅くなくても構はないといふ風に仕事を割振つたものであります。さういふ大陰曆の時代に、二十九日若しくは三十日の日取りでは少し長過ぎるから三つに別けて、上の十日、中の十日、下の十日と三つに別けたのであります。今日も猶ほ其言葉が残つて居ります。即ち上旬、中旬、下旬といふのがそれでありまして、下旬は十日の時と九日の時がありますが、其一句の十日を名けて一日が甲、二日が乙といふ風に日の名前にしたのであります。之が今日の十干でありまして昔は十日と稱へたものであります。要するに十干といふのは日取りを數へる番號であります。それから十二支の方は之は一年十二ヶ月に附けた月の名前であります。子月、丑月、寅月といふ風に稱へたのであります。併し唯子月、丑月、寅月と言つたのではさうも餘り色氣がないと考へたのでありませう。それで之を支那の幾らか邊鄙の地方に支那の曆を傳へる時分に色を付けて之に動物を配當したのであります。子を鼠、丑を牛、寅を虎といふやうに、鼠月、牛月、虎月といふやうにすれば子供にでも分る、詰り分り易くする爲に動物を配當したのであります。それが今日では動物の方が主になつて子を書けば鼠と讀むのが本當のやうになつて居ります。昔は十二支のこゝを十二辰と唱へて居つたのであります。十の循環、十二の循環と之を組合せるに便利である丁度六十といふものが出来るから、それで六十干支として日を數へたり年を數へたりするやうになつたのであります。

それで五行説が起つてから十干及十二支を此五行にそれぞれ割當てやうになつたが之が難かつたのであります。十のものを五に割當てるのは之は何でもない木火土金水に各々二つづつやればよいのであります、十二支の方も之も矢

張五つに割當てなければならん、さあ之には困つた、今日でも出来ない、私にも出来ない、十二を五つに割つてくれといふ注文が出たら二、四をすれば譯はないけれども、二、四では何處から何處までが始めの二つ、後は三番目が十分の四を取つて居る残つた十分の六は火の領分であるといふやうでは非常に曖昧であるといふので大變苦心したものであります。今から二千年前頃の漢の初め頃の書物を見るに、色々之に付ては苦心してやつたがさうもうまく行かん、馬脚を現はして居るのが明かに見えます。それを茲に圖を持つて來たのであります。



十二支を五つに配當するといふ問題は一年の十二月を五行に割當てるのと同じことであります。此一年の季節の十二を何處から何處までが木、何處から何處までが火といふ風にさう割つたらよいかといふこと、一番初めにやつた人は理想的に春夏秋冬なんかやめてしまつて、月に關係なく一年三百六十五日を五つに割つたら宜いぢやないか、それで圖に子丑寅さ書いてあるのは月の積りであります。子の月の真中から終りまでを五つに分けて、一年を分つて五節とするさうやつたであります。洵に簡單で理想的であります。併ながら是では普通の人間は承知しない、それでは困るから何とかしてくれんか、それぢやといふので頭を捻つたのが、春秋秋冬、春は陽氣で木が成長する時であるから木にしよう、夏は仕方がないから始めの二ヶ月を火にして終りの一ヶ月を土、後を金さ

水にしようといつたのであります。併し之では火も不平、土も不平であります。火の領分は土の領分の二倍ある土の領分は一月しかない、木火土金水は皆同等の資格であるべきに火と土は領分が少ない。そこで又誰かが考へたのは、土といふものは一體地球全體に亘つたものであるから、さうこせこせ自分の領分のことを言はなくても宜いぢやないか、土は全體を支配して居るのであると祭上げてしまつて土の實際の領分を無くしてしまつたのであります。之も一つの案ではありますが、之では土が一寸も領分がないから不平を言ふ。そこで其次に捻出したのが、此各々の中から五分の二つづゝ取らう、木からも五分の一、火からも金からも水からも五分の二つづゝ不平なく皆から土の分を取つたのであります。成程之は宜からう五分の一宛を拾集めるに七十二日になる、木火土金水各々七十二日になるから之は宜い、之が今日まで行はれたわけであります。即ち四季の土用といふ言葉が今日まで残つて居ります。春の土用、夏の土用、秋の土用、冬の土用と言つて居ります。此土用といふ言葉はもごは土用ぢやない、土王用事と言つた、或は王に日をつけて土旺用事と言つたのであります。春の三ヶ月の間は木の季節でありますが、其末の十八日は土の氣が旺になつて事を用ふるものであるといふことが曆にあります。其王を取つて土用の事若くは土用といふことになつたのであります。斯ういふ風に配當してさうか斯うか治りをつけたのであります。之で一年三百六十五日は二、四づつで之でよいのでありますが、寅卯辰巳、之の配當はさうするか、各々から五分の二つづゝ取る譯にいかん、仕方がないので辰全體を土にしたのであります。圖の通り未も戌も丑も全體を土にしたのであります。そこでもう一つの問題は十干を五行に割當てる、十二支を五行に割當てるのでありますが、之には甲子、乙丑丙寅といふやうに六十ありますので之を又五つに割當てなければならぬのであります。六十の干支をさうして五つに割當てやうか、之が頗る難問題であります、色々をやつて見たがなかなか落付かないのであります。しまひにやつて落付いたのは音律の理窟をこぢつけて六十の干支をさうにか斯うにか割當てたのであります。甲は木、子は木、乙は水丑は土であります。そこで木と水を一緒にしたら何になるか、化學の問題のやうでありますが、木と水の化合物は何になるかと言はれても、返答に困る、さう考へて見ても之には返答が出来ない、そこで到々音律の理窟をこぢつけてしまつたのであります。で此甲子と乙丑を海中金といふことにしたのであります。其次の丙寅、丁卯を爐中火とした、それで段々順を追うて行きますと丙午、丁未は天河水になるのであります。之を音樂の律に取つたので納音五行といふのであります。今から二千年程前に音律に堪能な漢の京房といふ人が作つたといふのであります。

甲子) 海中金
乙丑) 海中金
丙寅) 爐中火
丁卯) 爐中火
戊辰) 大林木
己巳) 大林木
庚午) 天河水
辛未) 天河水
壬申) 大林木
癸酉) 大林木
甲戌) 大林木
乙亥) 大林木
丙子) 海中金
丁丑) 海中金
戊寅) 大林木
己卯) 大林木
庚辰) 大林木
辛巳) 大林木
壬午) 天河水
癸未) 天河水
甲申) 大林木
乙酉) 大林木
丙戌) 大林木
丁亥) 大林木
戊子) 海中金
己丑) 海中金
庚寅) 大林木
辛卯) 大林木
壬辰) 大林木
癸巳) 大林木
甲午) 天河水
乙未) 天河水
丙申) 大林木
丁酉) 大林木
戊戌) 大林木
己亥) 大林木
庚子) 海中金
辛丑) 海中金
壬寅) 大林木
癸卯) 大林木
甲辰) 大林木
乙巳) 大林木
丙午) 天河水
丁未) 天河水
戊申) 大林木
己酉) 大林木
庚戌) 大林木
辛亥) 大林木
壬子) 海中金
癸丑) 海中金
甲寅) 大林木
乙卯) 大林木
丙辰) 大林木
丁巳) 大林木
戊午) 天河水
己未) 天河水
庚申) 大林木
辛酉) 大林木
壬戌) 大林木
癸亥) 大林木

之に依りますこ今日問題になつて居ります丙午の生れの人の性質は水性であります。世間でいふ丙午の年は何故惡いかいふこ、五行の配當に依るこ丙は火、午も火で、火こ火が重なつて居るから其年に生れた人の性質は火の如き性質である、餘りに氣性が激しいから家の中を燃してしまふ、亭主を食殺すこいふやうなこを言ふのであります。併ながら火こ火を一緒にしたものであるから火であるこいふならば六十干支の處分がつかない、それでは火こ火が火であるならば木こ木は何になるか、其不平を一切やめてしまつて六十年をさうにか斯うにか處分したのはそれは天河水であります。さうしたつて丙午は火にはならない。今日問題になつて居る丙午は明治三十九年であります。此年生れの人の本命星は、中宮に入るべきものは四緑の木であります、九星の配當に依れば四緑の木であります。又之を五行に依つて判斷すれば天河水であります。こちらから見ても丙午は火の如き性質にならないのであります。而も偶然にも天河水がお嫁さんこは實に芽出たいこであります。天河に就ては牽牛織女の兩星の戀物語こでも言ひませうか、支那の古き傳説にある物語の地であります。之程芽出たいこはないのではないかこ思ふのであります。四緑の木も亦芽出たいこであります。支那の最も古い書物の詩經こいふ古い歌を集めたものがあります。今より二千五六百年程前の支那の俗歌なり又眞面目な歌を集めた詩經の中に婚禮のこを吟じた詩があります。其中に「桃之夭夭、其葉蓁蓁」其節に娘さんが嫁に行くのは、よく家人こ調和してよいであらう、こいふ嫁さんの婚禮を祝する爲に讀んだ詩が詩經の中にあります。之が即ち四緑の木である、是程芽出たいこはないのであります。それにも拘らず丙午は火であるこ難癖をつけるこいふこは實に情ないこであります。又現に九星家の所に行つて判斷をお頼みになつたならば、明治三十九年生れの嫁さんの性質を火性であるこは決して言ひません。九星から言へば木であります

私から言ひますこ之は皆間違つて居りまして、人間はもこもこ生物であります。假に五行説が成立つて居るこしても、人は五行の總てを備へたものでなければなりません。人間が即ち世界なのでありますから、此世界の中が木火土金水の五つから成立つて居るものであつたならば、活物である人間の性質は木火土金水の總てを兼備へたものでなければなりませんこ思ひます。

大分話が長くなりましたがもう一つ申したいこがあります。京都では大分家相のこをやかましく言つて居りますが此頃やかましく言つて居る所の家相は極めて近頃起つたものであります。今より百三四十十年前に始めて日本に起つたものであります。平安朝の頃に支那から家相の説が入つて來たのでありますが、支那の建物の建方こ我が國の建物の建方こは全く違ふので支那の家相の説を其儘輸入したのでは當嵌らないものでありますから其説は行はれなかつたのであります。

唯古くから残つて居るのは、今から二千年も前の支那のお伽噺の中に鬼門の話があるのであります。其話の筋道は、支那から見て東北の方の海の中に一つの島がある、其島の山の中の東北に大きな木があつて、其木の枝の下の方に門があるそれを鬼門といふ、其門は幽霊が集る所である、死んだ人が其處に集められて、生きて居る時にこんなことをしたかといつて裁判を受ける所である、斯ういふ話があります。支那で鬼といふのはオニではない魂のことであります。即ち死んだ人の幽霊、魂魄の集る所であります。其鬼門で生きて居つた時に悪いことをした鬼が苛められるのであります。鬼が苛められるのであります。鬼が人を害する所ではない、鬼が神さんから裁きを受ける所であります。もつこハイカラな西洋流の言葉で言つたならば天國でお裁きを受ける所であります。其支那の古い傳説が日本に傳つて來て、それを日本で取違へて鬼が其處に來て責める恐ろしい所であるとしてしまつた、そこで鬼門が恐ろしくなつたのであります。

京都に桓武天皇が都をお造りになつた時に、東北に當る比叡山に鬼門鎮護の大きな寺を拵へまして、あれは鬼門を鎮めて居ると言つたのであります。其頃はまだ鬼門がさういふ恐ろしい意味ではなかつたのであります。多少は佛教の鬼といふ意味が入つて恐ろしがつたのでありますが今日程やかましく言つて居らなかつたのであります。所が比叡山には若い坊さんが澤山居つたのでありますから、何か不平があるミストライキを起した。さうして日吉神社の御輿をかついで京都に來て自分等の意見を通さうとする、何しろ若い元氣旺んな書生さんがあばれ廻るのであります。何某天皇が、朕の意の如くならざるものは鴨川の水ミ賽の目ミ比叡山の山法師であると言はれた。あの坊主を怒らしたら困る、あれは鬼門だ、斯うなつたのではないかと思ひます。元は鬼門鎮護であつたのが、あれは鬼門だといつて恐れるやうになつたのであらうと思ひます。さうして其鬼門を段々に恐ろしく考へるやうになつたのでありますが、今から百三四十十年前に支那から色々の書物が渡つて來まして、日本では徳川の泰平が長く續いて來たものでありますから、九星其他の事が段々ミ行はれ家相なごもやかましく言ふやうになつたのであります。

近頃に於ける家相の始りは今から百三四十十年前には八卦の説に依つて家相を判斷したものでありますが、それでは工合が悪いといふので少したつてから支那から渡つて來たもので、五行説ミ八卦を一緒にしたやうな判斷の仕方では判斷したのであります。それでも猶ほ工合が悪いといふので今度は大阪の松浦琴鶴といふ者が——數學的に頭の發達した人でありませう、其人が九星の説に依つて家相を判斷することを考へたのであります。之が今日まで天下を風靡して居る家相の判斷の仕方であり、其來歴を陳列室に列べて置きましたが、それに依つて見ましても、今日の九星に依る家相の判斷が決して信用すべきものでな

いさゝか事は明かであらうと思ひます。それから同じく九星に依つて判斷するものにしましても、始りが今申しますやうに極めて新たらしいのでありますから流派に依つて其判斷の仕方が違ふのであります。唯多くの家相の判斷が一致して居るのは何かいさゝか鬼門だけであります。後の細々したことは皆流派に依つて違ふのであります。而も其起原なるものが先程申述べましたやうに比叡山の坊主の方から出た鬼門でありますから、家相家も初めは鬼門のこを退けて俗説として居つたのであります。明治初年頃に東京の小石川に尾島いさゝか有名な家相家がありましたが、此人なごも鬼門のこをやかましく俗説であること退けて居りました。全く流派の違ふ九星説からは鬼門は出て來ないのであります。廣く今日の多くの人の頭に之が入り込んで居るから金儲けの上手な家相家がそれに迎合して鬼門を取込んで居るのであります。此鬼門は先程申上げたやうなものであるとして、支那では鬼門は少しも恐れて居らるのであります。支那では芝居の花道のこを鬼門と言ひます。餘り不思議であると思つて聞いて見ると、支那の芝居は日本の能なごと同じやうに、時代物語、時代劇をやる俳優は其人の幽霊が其處に出て來て活躍するのである、俳優は即ち生きたる其人の幽霊であること考へたのであります。幽霊が出入りするから即ち鬼門である。俳優が出入りする花道が恐ろしい譯がないのであります。

今まで申述べましたのは、五行説及九星説はさうして起つたかといさゝかやうなこを申述べました積りであります。今日の日の吉凶及家相方位いさゝかが如きものは皆之に基いて居るのであります。尤も先程申上げました友引の如く之に基かん説もありますが主なる迷信は五行、九星説から出たものであります。而も其五行九星説なるものは、段々申上げましたやうに、昔は一般の人が之を眞理であり科學であるといさゝかやうに考へたものでありますけれども、二千年後の今日では明かに之は間違つて居る。落第したものであるといさゝかこを宣告をされたのであります。之に代つて起つたのが西洋文藝復興二三百年以來起つた新式の科學であります。今日の世界の文明は新式の科學に依つて勃興したものであります。其新式の科學を捨て、何時までも彼の失敗した科學に執着することは解せんお話であります。私は何も古い迷信に興味を持つて居るわけではないけれども、一年生の算術の答案がさうしてこんなに間違つた答案を出したかといさゝか筋道を吟味して、斯ういさゝか譯で此算術の答案が間違つて居るいさゝか其來歴をお話致しまして、さういさゝかものならそれに拘はるに及ばないいさゝかこを諒解して戴きたいと思ふのであります。まだ申したい事もありますが時間がありませんから是で終ります。(終)